

## 2019年12月8日 礼拝メッセージ(待降節第二週)

聖書:ルカの福音書4章16~24節

説教:聖書のみことばが実現した

はじめに

今週から待降節の第二週目を迎えております。待降節とは、使われている漢字に表されているように、「私たちのところへ降りてこられる方を待ち望むシーズン」と読めます。言うまでもないことですが、主イエスはおよそ二千年前に私たちのところへ既に降りてこられました。それなのにどうして毎年繰り返して待降節を過ごすのか。聖書にも、クリスマスを過ごしなさいとはいうようなことは直接には書かれていません。では全く意味のないことなのかと言えば、そうではないと思います。

主イエスは二千年前に来られて終わりではありません。この方は、再び私たちのところへ来られると約束してくださいました。これを再臨と呼んでいますが、その約束を信じて、主の再臨を待ち望んでいる、それがクリスチャンである、そのように言うことができます。

旧約聖書の時代、アブラハムから始まるイスラエルの子孫たちはずっと救い主が来られるのを忍耐しながら待ち望みました。私たちもそれと同じです。主の御降誕を待ち望んだ旧約時代人々の信仰を思い起こしながら、私たちも主の再臨を待ち望む。それが待降節の意味だろうと思います。

二千年前、長い間待ちに待っていた救い主イエスがイスラエルに来られました。では、みな喜んで救い主を迎えたのでしょうか。実はそうではなかった。皮肉なことに、救い主をこの世から追い出していきます。なぜそんなことになったのか。そこにどのような主のみこころがあったのでしょうか。そして私たちはどのような思いで主を待ち望むのか、考えていきます。

### 1 聖書

#### 1) イザヤ書

今日開いている所は、イエスが洗礼を受けられてまだ日が経っていない頃、自分の郷里であるナザレに戻ったときの話です。安息日に会堂に入られたイエスは皆の前で立ち上がり、渡された聖書を開いて読み上げます。18, 19節。「主の霊がわたし

の上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」

これはイザヤ書の61章1節と2節の前半の部分です。イエスはそれを読み終えると、巻物を巻き、座ったと書かれています。

#### 2) 立つ、座る

よく注意してください。16節に「立たれた」とあり、20節では「座られた」とあります。イエスがなされた事実をそのまま書いたということでしょう。でも聖書には一つとして無駄なことばがないはずです。どんなことばにも大切な意味があります。どうしてわざわざ「立つ」とか、「座る」と、詳しくイエスの動作を記したのか気になります。そのことは、また最後に触れることにします。

#### 3) あなたがたが耳にしたとおりに

イエスはイザヤ書を読み終えてから21節でこう語っています。「あなたがたが耳にしたとおりに、今日、この聖書のことばが実現しました。」

直訳すると、「あなたがたの耳の中で実現した。」あるいは「あなたがたの耳で聞いたことによつて実現した。」これももつと単純に「今日、この聖書のことばが実現しました」と言っても良いはずですが、なぜか「あなたがたの耳」が付け加えられているところが不思議です。聞くことがどうして関係するのでしょうか。これも考えなければなりません。おそらくすべての鍵はイエスが読んだ聖書にあると思われます。

### 2 旧約に記された救い主

#### 1) イザヤ書

そこでイザヤ書61章1節を見るとこうなっています。「神である主の霊がわたしの上にある。」

「主の霊がわたしの上にある。」これと同じフレーズをどこかで聞いたことはなかったか。調べてみるとイザヤ書の中でもう一箇所出て来る。11章

1、2節です。「エッセイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に主の霊がとどまる。」

## 2) エッセイの根株から

エッセイはダビデの父親の名前で、根株とは切り倒されたりして地面に残った木の株のこと。ある日、その根株から若枝が出て来て実を結び、主の霊がその上にとどまっている。いったいこの若枝とは何者なのか。これだけでははっきりしない。ところがイスラエルの人たちはピンときてすぐに理解できた。神がかつてダビデにこう語っていたのを覚えていたからです。第二サムエル記7章12、13節。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼は私の名のために一つに家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

神がダビデに約束してくださったこのこととイザヤのことばをつなげると、若枝とは救い主を指すことは明かです。それで人々は、イザヤの時代から数えれば七百年以上も救い主をずっと待っていた。

このように待っていた人たちが、イエスの口から「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました」と言われたを聞いたのです。人々が驚いてイエスをほめたたえるのは当然です。

## 3) 郷里では歓迎されない

そこまでは良かったのですが、ここから暗雲が漂い始めます。ここはイエスが育った郷里です。わかりやすく言いますが、小さな村のことですから、人々はイエスが「はたれ小僧」であったときからよく知っています。そのイエスが突然村から姿を消します。いったいどうしたのかと村人たちが首をかしげていたら、隣町のカペナウムからイエスの噂が聞こえてきた。どうもイエスは病をいやしたり、悪霊を追い出しているらしい。噂は本当なのか。なにか怪しいことをしているのではないか。そんなときにイエスがひょっこりとナザレに帰ってきた。そうしたら村の人たちは何を考えるか。カ

ペナウムでやったことをここでも見せて欲しい。他ではできたのに自分の村ではできない事はないだろう。「医者よ。自分を治せ」ということわざにもあるではないか。イエスは人々の心の内にあるものを知って、このように言います。24節。「まことに、あなたがたに言います。預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。」

このあともまだ続きますが、それは来週見ることになります。いずれにしても、イエスは人々の好奇心に冷たい水を浴びせるようなことを語る。このあとどうなったかと言えば、会堂にいた人たちは腹を立て、崖から突き落とそうとしたと書かれています。「歓迎されない」とは、冷たい視線を向けられるとか無視されるという意味ではない。殺されるということです。それはナザレの話に留まらない。イエスはこの世界を造られた方です。その方が私たちのところへ来られたということは、ご自分の郷里に来られたということ。自分の郷里では歓迎されない。やがてこの方は殺されることを示唆しています。

## 3 聖書のみことばが実現する

### 1) 恵みの年を告げるけれど（レビ記25章11節）

このような道を歩もうとされる方が、なぜここでイザヤ書を開いて読むのでしょうか。「主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。」主が救い主である方を遣わす目的はいくつか書かれていますが、その中の一つ「主の恵みの年を告げるために」に目を留めます。「恵みの年」という表現は、レビ記25章11節が背景にあると思われます。要約すれば、生活のために自分の土地を売ってしまった人たち、あるいは奴隷として売られてしまった人たちは、五十年ごとに「ヨベルの年」に定めて、無条件で土地を失った者は土地を取り戻すことができるし、奴隷に売られて者は自由の身分に回復する。人々にとってはまさに恵みの年であるわけです。

これと同じように、油注がれて遣わされて来た救い主は、捕らわれた者を解放し、しいたげられている人を自由にすると宣言する。宣言するだけでなく、実際に盲人の目を開き、病をいやし、人々を自由にしていきます。

## 2) 耳にしたとおり、実現した

良いことづくめようです。ところがイエスは郷里では歓迎されず、崖から突き落とされそうになる。そうしますと、さきほど21節で「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました」とわざわざ言われた理由は何か。そのことをわきに置いていましたが、少し見えてきたのではないのでしょうか。

「主の恵みの年を告げるために」にこの方は、ご自分のいのちを十字架で捨てるという道を歩まれます。人々が知らない間に、この方お一人だけで黙々といのちを捨てるというのでしょうか。まったく違います。この方は郷里では歓迎されません。人々のねたみと怒りによってこの世から追い出されていく。その結果、十字架につるされていきます。人々の手によってつるされる。人々が救い主を殺そうと決心したのはいつでしょうか。イエスが言っています。「あなたがたが今耳にしたとおり。」このときです。

主の恵みの年を告げるために遣わされた救い主は、いったいどのようにしてこの使命を果たしていくのでしょうか。この方が私たちと無関係にしてください、のではない。私たちがこの方を手にかけることによって実現する。そのようにしてイザヤの預言が実現する。それが「あなたがたが耳にしたとおり」ということになります。

## 3) 座るイエス、立ち上がる人々

最後に残った疑問を考えます。イエスは立ち上がり、イザヤ書を開いて読み上げ、それが終わると巻物を閉じて人々の見ている前で座りました。なぜ立って座るとわざわざ記しているのか。その意味はなんだろうかという疑問をわきに置きました。

人々はイザヤ書に書かれていたことを信じて、ずっと待ち続けていました。待ち続けていたことがいままさに実現する。そのことがはっきりとすべての人の耳に聞こえるためにイエスは立ち上がった、と考えるみたらどうでしょう。そうしますとでは、座ったのはなぜか、ということになる。

イザヤの預言は、人のうちにあるイエスを殺そうとする思い、人のうちにある罪によって実現する、イエスはそのような意味で語ったことを見ま

した。「預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません」と、まるで火に油を注ぐかのようなことを語ったとき、人々は立ち上がって(29節)イエスをののしり、会堂から引きずり出そうとします。そのときイエスはどうしていたのか。座っていました。身を低くしていました。村の人たちですから、みな知った顔だったはずです。隣のおじさん、おばさんもいたでしょう。ずっとそれまでは親切で穏やかな人たちが、顔を真っ赤にし、拳を振り上げて、イエスの胸ぐらをわしづかみにしてきます。イエスは、そのようにして挑みかかってくる人々の怒りを真正面から受けとめます。

救い主を待ち望んでいた人たちであったのに、いざとなると腹を立てて救い主を十字架に追いやっていく。これが罪人の姿です。あの会堂の中にいたのはだれだったのでしょうか、イエスの郷里の人たちです。それはナザレ村の村人という意味だけではない。イエスの郷里に住む私たちもあそこにはいたのではないか。

私たちが聖書のみことばを耳にしたとき、私たちは自分の心の内に何を抱いていたのかを知りました。イエスを十字架につける。そのような思いがある。それに気がつくことと、聖書のみことばが実現していくことが同時に起こる。

私たちの罪を、身を低くしながら受けとめてくださった主のあわれみを思い起こします。